

2章の個人学習（書き込み）の個別指導より

2章の個人学習の時間、まだ、一人では学習を進められない洋志・悟司・直也の3人を集めて、いっしょにかきこみの勉強をした。
マンツーマンに近い形でやってみると、案外すらすら考えが浮かんでくる。特に直也の読みには、はつとさせられることが多かった。

「兵十のうちのだれが死んだろう。」

智将 ただ、だれが死んだのか不思議なだけ。

美由紀 いっしょうけんめい考える。だれがほんとにしんだんだろう。

公美 心配している。

直也 兵十のことなんか気にしてない。

「この子どもたちの書き込みは、「心配している」「ただ、知りたいだけ」と2通り出ていた。それを見て、私は、ここを取り上げることで、兵十とごんの関係（ただのいたずら相手）がはっきりおさえられるのではないか。そうすれば、「おれと同じひとりぼっちの兵十か」を契機として急速に心を寄せていくごんの心がより鮮明にとらえられるのではないかと思った。そんな思わくをもって、2章の話し合い学習の前半を、その追求にあてた。しかし、その結果は、思わぬ悪戦苦闘を強いられることになった。

T 「兵十のうちのだれがしんだんだろう。」というところは、

どんな気持ちで言っているんだろうか。……このとき、うんと心配になったのか。それほど心配はしていないのか。

うんと心配になった、という人手上げて

C 10名ぐらい

宏 もし兵十だったら、と思って心配している。

有香 兵十は、いたずらをした時に相手にしてもらえないというか

和樹 兵十が死んだらあんまりいたずらができない。

大裕 いっしょで、兵十ともうけんかができない。

由美子 いたずらして、1回おこられているから、

T 今言うてやるのは、兵十とはけんか友達みたいなものだから心配している、というんやね。

そうじゃないという人

直也 この時は、兵十のことなんか気にしんと、だれが死んだか知りたいだけ。

智将 だれかわかった時に、「ははん。」ていつているから、この時は、ただ知りたいだけ。

邦臣 ぼくも直也君とよく似ていて、ごんは、兵十のうちのだれが死んだか調べたかっただけ。

T ただ野次馬みたいに、「だれが死によったんやろな。」て感じ。

治武 兵十の場合は、心配していると思う。

衣利子 兵十にいたずらしたせいで、だれかが死んだんだろうと
思って心配している。

T ほうすると、

うんと心配してる、ただ知りたいだけ、

この時のごんのはどうだったのか、もう一度、前とか後を読んでも考えて下さい。

T もう一度、手あげて、（やはり2つに分かれる。「どちらかわからん」という子も出てくる。）

子どもたちはごんにとって兵十は、他人の関係ではない、という読みをしている。いたずらという形ではあってもある親しみを持っている、と読んでいる。それはそれで認められるのだが、安否を気にするほどの関係ではない。そのことを直也たちはつかんでいる。

こういう形で、課題を明確にして、読みにもどせば、子どもたちの力で解決できるだろうと見ていた。しかし、それが安易であった。

直也 「なんだろう。」やで、ただしりたいだけ
大裕 あんまり心配してないから、「ははん。」で何かいばって
やるいうか、

T 「ははん」で、軽そうに言うてやる？

智将 ただだれか分かってなっとくしただけのように

和樹 「ああそう式だ」で、あんまり心配してない気がする。

もし心配してたら、「あつ」ていう。

優子 「そうしきだ」てわかってからも、墓まで行っている。だから心配している。

哲 「ははん」でわかったん。ずっと考えてて。

有香 今まで兵十が死んだら、と思って心配していたら、兵十のおつかあとわかって、何かほっとしたみたい。

T そうると、ここまで、ずっと心配の気持ちで見ていた、というの？

宏 兵十のおつかあが死んだとわかって兵十が死んだのではないとわかって心配がなくなった。

政義 そのばん穴の中で、だから、それまで、ずっと心配していたと思う。

直也 反対！と思う。

だれが死んだかわからんかって、墓へいって「おつかあだ」とわかって、ほれまで心配してないんやけど、穴の中で考えているうち、心配になった。

T わかってから、心配になった、というのと、わかってほっとした、ていうのと

和樹 「のびあがって」だから、やっぱ心配。兵十はどこにおるかって心配して見ている。

朝子 家の中をさがさないで、墓地へ行っているということとは、心配じゃなくて、ただ見にいっている。もし心配していたら、もつとよくさがす。

T そこまでしていないということは、あんまり心配なんかしてない。さあ、真つ二つに分かれたね。どうしたらいいかな。

衣利子 あまり心配ではなかったけど、頭を引っこめてだんだん朝子 赤いさつまいものような顔がしおれていたのを見て、そこから、他人のことでないように、兵十のお母さんのことでも、自分とは他人と思えんようになってきた。

安易に取り上げたのだが、思わぬどろ沼にはまってしまった。ごんの兵十を見る目を考えるには、2章の中だけの読みでは無理だったのだ。1章でのいたずらの場面あたりを読み直してみたらどうだったかとも思う。しかし、そこではつきり決着をつけられる自信もないので、ここは、残しておくことにして、次の「ちよつ、あんないたずら」を考えることにした。

「ちよつ、あんないたずらをしなけりやよかった。」

今まで、ごんは、いたずらするたびに、「あんな……」て後悔

このあたりで、心配派も納得してくれるだろうと期待したのだが、

有香は学級でもよく読める子の一人なのだがこういうへんな読みをしてしまう。これに対して他の子から強烈な反対意見を期待したのだがでない。

宏まで、その読みに引っ張られる。

すなおに読めば、直也のようになるはずなのに、どうして、子どもたちは、そう読んでくれないのだろう。この時は、どうして、心配派を納得させればよいか、その方策が見えなかった。

とりあえず、整理はしてみたものの、その先の手がみえない。

この言葉だけみているから、どちらにでも読める。

こういう意見は、他の子にすつとはいらない。したがって、あまり聞かない。

どろ沼に足を取られてでられない気分

まさに、この朝子のような読み方をみんなに入れたいのだが、広げられない。

したの？

C してない。ただおもしろがつてるだけ。

T そんな、ごんが、この時ばかりは、「あんないたずらしなけりやよかった」と思うのは、どうして。

美由紀 今までいたずらしたなかで、一番いやないたずら。

由美子 いつも元気な兵十がしおれているのをみて、なんか……

なつ希 人が死んでしまうほどのいたずらをしたことが

兵十のおつかあが、うなぎが食べたい食べたいといって食べないで死んでいったから。

T 美由紀が一番いやないたずら、ていいましたね。いやな、てどういことがいやなのかね。

宏 おつかあは、ごんが死なせたみたいに思えるの。ほんまは病気でしんだんだけど、

T 自分が殺した、と思っているの。自分が殺したと思ってくやんでいるの。

宏 そうじゃないけど、そんな気がするん。

有香 食べたい食べたいと言っていたうなぎだから兵十のおつかあを殺したような気がするの。

優子 うなぎをとらなかつたら、兵十のおかあが最後にしたいと聞いたことをできた。

祐子 今日は、なんがたらしおれていた、のところ、もし、あの時うなぎをたべさせていたら、こんなしおれた顔はしなかつただろう、あの時たべさせていたら、兵十は、しおれていなかっただろう

授業中宏や有香の考えは、つぶしておきたいと思っていた。しかし、

とてもいいことを言っている。しかし、みんなのものになっていけない。

前半のごてごてした展開が尾を引いて、ここでも、いくつかいい発言はでているのだが、それをみんなで共有するものにならないままだった。それで、もう一度次の時間ここをやることにして終わった。